

英語科・情報科コラボレーション授業の実践

埼玉県立浦和北高等学校 教諭
岡村 起代之

1. はじめに

本校では英語科と情報科がコラボレーションした「英語全員プレゼン」の授業に取り組んでいる。1年次生徒(約320名、学年9クラスの場合360名)が全員、英語だけでプレゼンテーションを行い、またネイティブのALT(外国語指導助手 Assistant Language Teacher)の英語の質問に英語で答える。国際社会で通用する英語力と時代に即したコミュニケーション能力の育成、そして進路意識の向上を目指す。ここでは、4年間取り組んできた「英語全員プレゼン」と、その前段階である「全員プレゼン」の概要について報告させていただく。

2. 学校概要

埼玉県立浦和北高等学校は荒川近くに位置する全日制普通科の単位制高等学校だ。学年の区分を設けず、学年修了の認定を行わない。このため本校では「学年」ではなく「年次」とよんでいる。男女比約1:1、大多数の生徒が進学希望。生徒は多様な選択科目の中から、所定の単位数分の科目を各自で選択する。

なお本校では、平成21年度より26年度まで連続して10企画がJST(国立研究開発法人科学技術振興機構)によるSPP(サイエンス・パートナーシップ・プログラム)事業に採択された。情報に関する内容を中心として生徒の科学に対する知的好奇心を高め、問題発見・解決する能力を育む試みを継続している¹⁾。

3. 情報科の講座

情報科の科目では「社会と情報」または「情報の科学」の2単位を1年次で選択必履修。平成24年度までは「情報A」または「情報C」の選択必履修となっていた。「情報の科学」および「情報A」は、情報機器の扱いに慣れている生徒が選択する傾向にある。

学校設定科目「実用基礎プログラミング」は、2、3年次2単位の自由選択講座で、情報関連の大学・専門学校等へ進学、または将来的に情報関連の職業に

就くことを希望する生徒を中心に選択を勧めている。

本稿で紹介する「全員プレゼン」および「英語全員プレゼン」は、平成24年度までは「情報A」および「情報C」で、平成25年度より「社会と情報」および「情報の科学」で実施している。

4. 「社会と情報」「情報の科学」授業概要

「社会と情報」および「情報の科学」の各講座では、教科書の進行に合わせて、随所で文書作成(Word)、画像編集(Photoshop Elements)、表計算(Excel)、プレゼンテーション(PowerPoint)、動画作成(Flash)の各アプリケーション実習を行う。筆記による定期考査は1学期および2学期の中間考査のみ実施。2学期期末考査ではExcelを中心とした実技テストを行う。

「社会と情報」および「情報の科学」の担当者は、「全員プレゼン」に向けて9月にPowerPoint実習ができるように進度を調整している。

5. 日本語による「全員プレゼン」

本校で実施されるプレゼン企画は2つある。9月、10月に情報科が単独で行う、日本語による「全員プレゼン」。そしてこれを受け2月からはじまる英語科・情報科コラボレーション企画「英語全員プレゼン」。

次は「全員プレゼン」の概略だ。

(1) プレゼンテーションテーマ

「一般には～と言われているが私は～だと思う」の形式(特定の団体、思想、政治、宗教、公序良俗に反することをテーマとしない)

(2) 発表時のルール

- ・時間は1人3分以内
- ・同様のテーマは同じクラス内で重複させない
- ・発表順はその場での抽選による
- ・相互評価を行う
- ・メモを見ること、読み上げることは禁止
- ・スライドは5枚以上

(3) 生徒が設定したテーマの例

- ・エスカレーターの片側は人が通れるようにつめるべきだと言われているが、私はつめるべきではないと思う
- ・一般的に犬は飼い主に似ると言われているが、私は飼い主が犬に似るのだと思う
- ・義務教育は中学生までだが、私は高校生までにすべきだと思う
- ・一般にアニメは日本の文化だと言われているが、私は大人が子供化してきただけだと思う
- ・プロポーズは男がするものだ、と言われるが、それは男のエゴだと思う

本校では7年間、この「全員プレゼン」に取り組んでいる。プレゼンテーマの検討は、情報科が課す夏季休業中の宿題であり、生徒は夏季休業終了後、最初の授業でテーマを提出する。テーマはクラスごとに担当教諭と生徒で調整し、決定後、生徒はスライド作成を開始する。世間一般に言われていることが、自分の考えと異なることは多い。しかし15、16歳の若者にとって、世間と異なる自分の考えを、大人数を前にして主張するのは大きな試練だ。テーマは生徒が自由に決めるが、クラス内で重複しないようにする。「裁判員制度スタート」「原発再稼働」「なでしこ」「東京オリンピック」。7年間でテーマは大きく変化する。毎年の生徒のテーマにそれぞれの時を感じる。

発表が近づくと教職員全員に広報を行い、管理職、クラス担任、年次所属の先生方、その他すべての教職員に聴衆として参加していただくようお願いする。メモを読み上げるのは禁止。スライドを確認しながら、聴衆の目を見てプレゼンするように指導している。

本番の発表時間は最長3分。2分半で1回目のベルを鳴らす。決められた時間内で発表する大切さも意識させる。担当教諭がストップウォッチで時間を計りカウンターベルを鳴らす、という原始的な方法だ。このほうが、プログラムを組んだ自動的なデジタル表示より、「発表会」の雰囲気が盛り上がる。

発表順は、完全な抽選による。誰が発表するかは、その場にならなければ担当教諭にもわからない。順番を決める抽選ソフトはExcel VBAによる手作りだ。抽選ソフトのプログラム内容を生徒に公開し、



図1 発表順抽選ソフトの画面

まったく無作為に抽選されていることを示す。

男子生徒ばかり、女子生徒ばかり、会話が苦手な生徒ばかりが連続して当たってしまうこともあり、担当者が緊張することもある。無作為の抽選であるため、事前の配慮とクラス担任への確認には気を使っている。

全員の発表終了後「再チャレンジ」と称し、希望者にもう一度プレゼンテーションの機会を与える。クラスで何人かの生徒が、挑戦している。

●全員プレゼンの流れ

- ① 担当教諭より全体的な注意
- ② 公開抽選
- ③ 指定された発表者が教室前方に移動し、担当教諭がスライドを用意
- ④ 発表開始、聴衆である生徒は適宜相互評価を入力
- ⑤ 発表開始後2分30秒で1回目のベル
- ⑥ 発表終了(発表開始後3分で2回目のベル)
- ⑦ 担当教諭よりアドバイス
- ⑧ ②～⑦を繰り返す
- ⑨ 担当教諭より全体的なアドバイス

7年間もやっていると、ユニークな発表にも出会う。「歌を歌います」「岡村先生の物まねで発表します」。毎年緊張し、また楽しませてもらう実践だ。元気な若者の主張を毎年開けるのは教師冥利に尽きる。

6. 英語全員プレゼン

「英語でプレゼン 伝える力 磨く」。これは今年2月、朝日新聞埼玉版にご紹介いただいた、本校「英語全員プレゼン」の見出しだ。英語、コミュニケーション、プレゼンテーション、それぞれ「力」という

文字がついた能力が求められる時代だ。学習指導要領の「情報」「第3款 各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」では、「情報科での学習が他の各教科・科目等の学習に役立つよう、他の各教科・科目等との連携を図ること」と記されている。本校では前述の日本語による「全員プレゼン」の延長として、英語科とコラボレーションし、4年間「英語全員プレゼン」を実施している。

生徒はスライドの作り方や基本的なプレゼンテーション技術を情報科の授業で学んだ後、英語によるプレゼンテーションに挑戦する。そして冬季休業中の英語科宿題として、英語プレゼンの流れとスライドのラフスケッチを作成する。英語科教諭は、3学期最初の授業で提出された内容を添削し、アドバイスを行う。そして英語科と情報科で決定したスケジュールを教職員に公開。全生徒の準備が整った後、本番の発表を迎える。



図2 生徒の発表風景

発表時、1時間内の流れは次のようになる。

●英語全員プレゼンの流れ

- ① 情報科教諭から全体説明
- ② 情報科教諭による抽選
- ③ 生徒プレゼン
- ④ ALTからの英語によるアドバイスおよび質問
- ⑤ 発表者からの英語による回答
- ⑥ ②～⑤を繰り返す、この間に全生徒が相互評価、英語科・情報科教諭が生徒の評価を行う
- ⑦ 英語科・情報科教諭からのアドバイス

英語に係る指導を英語科教諭とALTが、そしてプレゼンテーション技術に関する指導と全体の進行を情報科教諭が担当する。コミュニケーション力の

育成に関しては、英語科・情報科両観点からの指導となる。

発表順を決めるソフトは、「全員プレゼン」で使ったものに手を加え、たとえば7番の生徒が当たると「next」「seven」「your turn」とVBAで発音させるようにした。スロットマシンのように流れ、やがてゆっくりと止まり表示される番号が雰囲気盛り上げる。

生徒は英語で発表するだけではない。英語によるプレゼンの後、ネイティブのALTが英語で質問し、その質問に生徒は英語で答える。「いっさい日本語は使わない」というルールがある。たとえ拙い英語、ボディランゲージであってもよい。大勢が注目する中でネイティブの方とコミュニケーションする経験は、将来に繋がる力になるはずだ。ALTは一人一人プレゼンを終えた生徒に、「Good job」と声をかけた後、質問に移る。質問は発表内容に関連した「what」「why」「which」ではじまる、あるいは単純に「yes」「no」で答えられる内容だ。

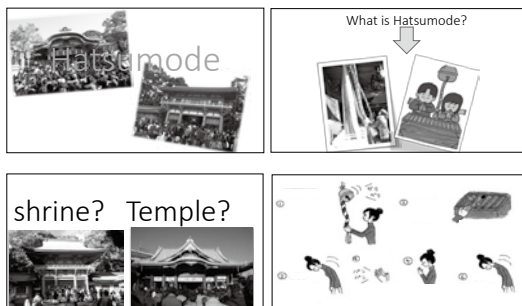


図3 生徒の発表スライドの一例

ほとんどの生徒は、練習を積み重ねてからプレゼンテーションに臨む。情報科の担当としては、「英語で主張する」というレベルまで達成できていると思う。日本語による同様のプレゼンテーションを一度こなしたことが大きく作用しているのだろう。問題は英語によるプレゼンテーション後の「質問タイム」だ。

人前で何も見ずに英語でプレゼンした後、すぐにネイティブのALTから英語で質問され、さらに英語で答える。生徒にとってははじめての経験であり、特に英会話が苦手な生徒にとってはハードルが高い。英文の質問を読んで理解し、その答えの英文が書けたとしても、同じ内容の言葉の質問に言葉で

答えられる訳ではない。

ALTは、生徒が質問内容を理解していないことがわかると、別の言い回しをしたり、容易な回答例を挙げたりと工夫し、とにかく何かの答えを引き出す。生徒には、少なくとも「意見」があるのだから、その「意見」を英語で引き出そう、とALTは試みてくれる。



図4 ALTの指導風景

7. 生徒の相互評価

「全員プレゼン」も「英語全員プレゼン」も、プレゼンの最中、聴衆となる生徒は相互評価を行う。日本語による「全員プレゼン」では、生徒は「わかりやすさ」「論理性」「スライドの質」「発表態度と時間」の4項目について各5点、20点満点で評価し、改善のコメントを入力する。生徒には「まずはよかった点を、そして改善のアドバイスを書く」よう指導している。また事前に「評価をすることが学習」であること、そして「評価の仕方も評価」する旨を伝えておく。

相互評価のコメントは、教諭がチェックした後該当の生徒に、記入者を伏せて配布される。生徒は聴衆である生徒からのコメントを直接読み、改善を図る。

8. 教員からの評価

英語全員プレゼンでは、英語科教諭は英語科としての観点から評価をつける。また、情報科教諭は情報科として、生徒同様に「わかりやすさ」「論理性」「スライドの質」「発表態度と時間」の観点から評価をつける。情報科教諭は生徒の相互評価を参考にして情報の成績に反映させる。当然ながら教諭の評価と生徒の相互評価には大きな相関がある。しかし生徒の相互評価には、生徒どうしの人間関係の反映が見られることもあり興味深い。

英語の評価は学年全体で集計し、1年次必履修の英語科講座の成績に反映させている。生徒は成績に直接

関係することも意識し、緊張感をもって臨んでいる。

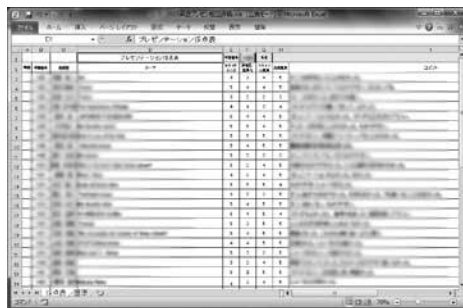


図5 生徒の相互評価シート(イメージ)

9. 課題・今後の展望

本校は単位制であり講座構成は複雑である。このため、英語科・情報科両方の特定の教員が常に参加できる授業は存在しない。「英語全員プレゼン」では英語科教諭が情報科の授業に参加する形態になっている。1年次の英語科教諭が中心となり、参加する教諭と授業を調整する。英語科教諭とALTは本来の授業以外に、無理に時間を空けてコラボレーション企画に参加することになる。2月、3月は、3年次の授業が少なくなるのでこの時期を選んだが、年度末の多忙な時期であり、英語科の負担は大きい。

また、ALTには1人で320名(360名)というたくさんの方の生徒全員に、丁寧に対応していただいている。これができるのも歴代の本校ALTの人柄によるところが大きい。

本校生徒は、1年次で2つのプレゼン企画に挑戦することで、大きな成長がみられる。朝日新聞埼玉版では英語全員プレゼンを「さながら米国発祥のトークライブTEDのよう」と評価していただいた。しかし、まだまだ発表内容は、「自分の意見」にはほど遠い生徒も多い。将来的には国語科や公民科などの連携も模索し、さらに学校全体の企画として浸透していけばありがたいと思っている。

参考文献

- 1) 岡村起代之「浦和北高校6年間のSPP事業実践」『情報通信i-Net』第39号、2014年9月